

私の
子ども



見詰めた時代

見詰められた時代

時代 (3)

赤羽 美代子

私は、東京の港区麻布に数百年程居住する旧家に、一九二九年、八人兄妹の末子として生まれた。生後間もなく里親の元で育ち、小学校就学迄、ひとりっ子として育っている。

養父の勤務の為、五歳の時に都下の保谷市に養父母と共に転居する。当時の保谷市は、駅前が少々の商店街の他は、広びろとした畑であった。

保谷市に着いた日、車から外に出た私は、突然、春のむせ返る土の香が、キーンと鼻を突き、鼻孔がピタッと張りついてしまった。この、突然の呼吸困難が、何がどうしたのか理解できぬまま、急ぎ車中に逃げ込む。

その時、車の窓より眺めた自然界が、生まれて初めて身に触れた、本当の春の姿の様



に思えた。それは一幅の初春を画いた絵の様な景色が、のびやかに、うららかに、私の眼
中いっぱい広がった。

◎ 弾丸お結び

保谷に転居してから、すぐに、近辺のお百姓家の腕白小僧たちと友だちになった。見る
事、聞く事が私を夢中にさせ、心も踊り、身も踊って、一日が遊び暮れた。五、六名の遊
び仲間のガキ大将は、トシ坊である。トシ坊の表現方法は、少々荒っぽいが、心優しい正
義の見方、頬の赤い六歳位の男児である。

或る日、「東京のお嬢ちゃんに、内の小豚を見せてやる！」と、トシ坊の一言に、私は
トシ坊にしっかりと手を引かれ、畑の中の一本道を、腕白たちとワーワーと真っしぐらに
駆け出した。養母には、自分の行き先を告げずに行く事に、後ろめたさを感じながらも、
「すぐ帰るから、すぐに帰るからね」と、自分に言い聞かせ、腕白たちに遅れまいと、
トシ坊の家に急いだ。途中、「東京のお嬢ちゃんが疲れるから、今から、ゆっくりと歩
け！」との、トシ坊の命令に、腕白たちは、私の歩幅に合わせて歩く。程良い時に、「そ
れ！」の、トシ坊のひと声に、馬の調教よろしく、全員カッポカッポ、ワーワーと駆け出
す。

全員の疲労感、程良い時を心得て行動するトシ坊は、リーダーの資格十分である。
トシ坊の家に着く。薄暗い土間で、トシ坊のオバさんがお結びを握っている。オバさん



の数本の指には、絆創膏がペタペタと張りついている。ニギニギ、グニャグニャと、確かなリズムでオバさんの掌中で繰り返されて、お結びが握られていく。たちまち、弾丸の様な大きな御飯の固まりが握られた。私には、ニギグニャの音が、私の五感に何とも気持ち悪く響いた。腕白たちは、いつになく静かに、オバさんの手許を見詰めて、順番を待っている。オバさんは自分の手の平に、生味噌をピチャリと塗ると、お結びを、掌中で器用に白と茶のまだら色に変化させた。

やがて腕白たちは、口一杯に、白と茶の弾丸を押し込み、にこにこ食べ始める。

私は、弾丸を乗せたお皿を両手に持ち、途方に暮れた。「こんな気持ちの悪い物は食べられない。でもオバさんに悪い」と、思えば思う程、弾丸を見詰めた目から、涙と鼻が湧き出てくる。養母にだまって来た罰が、早くも当たってしまったかと、一層悲しくなった。

トシ坊たちは、私の姿に驚き、「食べても良いんだぞ!」と、わめき出した。オバさんも驚いて、「東京のお嬢さん、もつと味噌つけた方が良いのか!」私は慌てた。「お母さんに見せてから食べる」「こんな物、見せなくてもええよ」私「持って帰る」。オバさんは「そんなら包んで上げるから」と、すすけた竹の皮を、自分の汚れた前掛けで一拭きすると、更に弾丸の上に生味噌をピチャと乗せる。新聞紙に包み込み、トシ坊に持たせた。

腕白たちは、私を真ん中に挟み、ワーワーと畑の一本道を駆け出し、我が家へと急いだ。トシ坊の手には、オバさんからのお土産が、しっかりと握られている。



既に、太陽が西の空へ傾き始め、夕焼けが美しかった。

保谷時代の私は、近辺のオジさん、オバさん、腕白たちから、「東京のお嬢ちゃん」と言う名を頂戴し、我が家近辺の、アイドル的存在であった。

過去の栄光は、再び返らない風と共に、吹き抜けて行った。

◎ ギンギンキラキラ、夕日が沈む

或る日の夕方、朱色に輝き、真ん丸に脹らんだ大きな太陽が、目の前の地平線に堂々と静かに沈んで行く。

鳥たちが、太陽を追い駆けて、夕日の中に消えて行く。

私には、太陽が、すぐ目の前に見える地平線の向こうに落ちて行く様に見えた。太陽がどの様に転がっているのか一目見たかった。「見なければ!」と、気持ち熱ってきて、私は地平線に向かい、一生懸命に畑の一本道を駆け出した。見て来た事を、友だちにも、家人にも話して聞かせたかった。

幼児の足でどの位、駆けたり歩いたりしたのか、やがて太陽がすっかり沈み、あたりは黒一色の闇となる。

やがて後方で、沢山の提燈の灯が、私の名を呼びながら、右に左に揺れて近づいて来る。五歳児の私は、そんな時にも、太陽を捜す仲間がふえたのかと大喜び。「こっちよー!」と、後方の提燈に手を振り、提燈たちを太陽迄誘導する為に駆け戻った。



その後、この件について、誰からも叱られたり、注意を受けた覚えがないのが不思議である。が、あの時、自然界の仕組みを科学的に教えを受けていれば、一人前に、利発になっていたのでは、と、苦笑いをしている。

◎ 歴史を創ってしまった、小学生時代

七歳の時、小学校入学の為、私は生家に戻る。夕食後は、長姉が私たち兄妹に、本を読んで聞かせる時間である。食後、早速にその準備を始める。我が家の新参者で一番チビ娘の私は、先ず座蒲団を五枚程、重ねて置く。次に、卓袱台^{ちゃぶだい}の上にお茶と長姉の好物の狸煎餅を器に盛る。全員の人数の枕を並べる。準備完了。長姉が牢名主の様に、積み重なった座蒲団の上に座すと、私たちは枕にごろりと横になる。本を読む姉の美しい声、歯切れ良い語調の調べに静かに聞き入る。途中のお茶タイムには、新参者の私とび起きて、お茶を入れ、長姉が、ポリポリとお煎餅をいただく口元を見詰めたり、兄弟方が本の内容について語る話に耳を傾ける。

小学校の歴史の時間には、先ず先週に習った内容を、級の皆に私が語る役を務めていた。先生は必ず「美代子さん、先週はどこ迄、話しましたか」「ハイ」、私が語り出すと、級がしんと静かになり、私の話の涙を流したり、鼻を擤んだり感動して聞いてくれる。私は語りに調子が乗ってくると、姉が読んだ文学の中の、メインらしき人物が、私の語りの中に出没する。宮本武蔵らしき人物、戦争と平和、風と共に去りぬ、若草物語の中の登



場人物らしき人びとが、自由自在に私の歴史の中に、出たり入ったりする。

終わり迄、私の話に静かに耳を傾けて下さった先生は、最後に必ず、こう締め括って下さった。「美代子さん、文学や小説は創作する物、歴史は創作する物ではありませんよ」私は「ハイ」と返事をして、着席する。

風邪で学校を欠席した日は、学友たちが学校の帰り、我が家に立ち寄り、今日一日の出来事を話してくれる。特に歴史の時間、先生が「美代子さんが、いないと淋しいね」と、話された。私たちだってもつまらなかった」と学友たちは話す。私はとたんに、日頃の先生の御注意をも顧り見ず、「そーかー。私がいなければ、歴史を創る人がいないんだー。早く風邪を癒して頑張らなくちゃー」と、武者震いをしたものだ。

◎ 父の後ろ姿

一九四四年、東京空襲も激しくなり、我が家も焼失する。

五月二十五日、港区も激しい爆風に煽られ、炎色と煙色に天も地も染まってしまった。

我が家族も、防空壕を出て、他に避難する事となる。当時、我が家には、焼け出された親戚の子どもたちが、三名程、来ていた。

防空壕を出る時、父が一本の綱を私たちに持たせ「この綱を決して離してはいけない。どんな時も、しっかり握っていないさい」と言い、父が先頭に立つ。母は最後の綱を



握る。

私の父は、麻布界限では、大酒豪で通っている。お酒が身体に入っていない日はない。私たち家族、母以外は親戚に至る迄、真正面の父の顔、姿を、まともに見たり、父と話し合った者は、いない。

父を思い出す縁は、此の空襲の夜、綱を握って子どもたちの先頭に立ち、台地を踏みしめて、火の粉が飛ぶ中を前進する、父の後ろ姿のみである。その夜、綱の前、後で両親が間断なく子どもたちの名を呼んだ。「ハイ。ここにいます」と、私たちは必死に返事をし、互いに確認をし合った。爆風に吹き飛ばされそうな瘦せた父の後ろ姿、無事な場所を捜し求めている父の後ろ姿を目詰めて、父に続いた。煙で目があかず、防空頭巾が頭の横にずれた。片目のまま、しっかりと父から目を離さなかった。真剣に父を見詰めた、只一度の父との接触の時であった。

この日、私たちは短時間で父の一生分の、後ろ姿を見詰めてしまった。燃え盛る炎の明かりの中で見詰めた、強烈な父の思い出である。

其の後、父の子どもたちが父を語る時は、顔のない、声の無い、父の後ろ姿を語り合う。前向きな父を語る時には、一同の口がへんの字に曲がり、目が三角になると言う現象が発生する。

毎日を幼児と共に過ごす私だが、私の幼児時代の過ぎ越し方が、「私の保育」をたらせているかな？と、思える瞬間、が時ときある。

(元・靈南坂幼稚園)